

japonicarum (1932) (81頁) では本體 KUKENTHAL 氏と同様に考へ和名もタチカハズスゲと云つて居られるが産地は特に列擧されては居らない。

で此の KUKENTHAL 氏の引用した二枚の標本の内、故 U. FAURIE 氏の採品は幸ひ當教室に副標本があるのでついで見た所我々がヒメカハズスゲと呼んで居る植物と殆んど差のないものであつた、最後の手段として獨逸の Berlin-Dahlem 植物園 R. PILGER 博士から KUKENTHAL 氏引用の原品二枚を拜借して見る事か出来たがそれによつて FAURIE 氏の副標本と同じくやはりヒメカハズスゲそのものに見誤りであつて *Carex laeviculmis* MEINSH. ではない。従つて *C. laeviculmis* MEINSH. は本邦のフロラから除かるべきであつて 勘察加でも疑はしく恐らく北米西部地方だけのものではあるまいかと想像する。

15) *Carex trichopoda* FRANCH.

東亞のスゲに關する FRANCH 氏の不朽の名著 *Les Carex de l'Asie Orientale* (1896-98) にはそのときまでに知られた種類全部について詳しい考證と記載とがある外に二十數葉の精巧を極めた圖版があつて我々スゲに興味を持つものの目を樂ませて呉れる。

同書の第一冊目の第十一圖版には *Carex longkiensis* FRANCH. と云ふ支那産のスゲと *Carex trichopoda* FRANCH. なる本邦産の種類の圖がある、此の *C. trichopoda* FRANCH. は始め故 U. FAURIE 氏が本洲の北端、陸奥國の五戸町附近で採集した標本につき FRANCHET 氏が *Bulletin de la Société philomatique de Paris* 8:7 (1895) p. 43 に發表した學名で、その後 KÜKENTHAL 氏 (1909) がコタヌキランの變種と考へて *C. Doenitzii* BOECKL. var. *trichopoda* (FRANCH.) KÜKENTH. と改めて以來そのまま今日に及んで居るが誰れも此の植物について調べた人はその後にはない様である、FRANCHET 氏の圖によるとコタヌキランに酷似して居て丈が低く雌花小穂が短かくその柄は著しく長いものであつて幸ひにも當教室には五戸町で FAURIE 氏の採集した副標品があるのでよく見た所タヌキラン即ち *C. podogyna* FRANCH. et SAVAT. の唯瘦せこけた、しかも未熟な標本であつてコタヌキランとは全く縁のない別物である事が判明した。

抄 録

クリストフォーウィツチ氏及ブリナチ氏：—烏蘇利地方中生代植物の研究

March, 1933.

143

(A. KRYSHTOFOVICH & V. PRYNADA:—A Contribution to the Mesozoic Flora of Ussuriland, in Bull. Unit. Geol. Prosp. Serv., vol. 51, Fasc. 22, 1932. pp. 363–378, t. 1–2.), (KRYSHTOFOVICH:—Discovery of the Oldest Dicotyledons of Asia in the Squivalents of the Potomac group in Suchan, Ussuriland, Siberia. in Bull. Comit. Geol. Ussr. tome 48, No. 9. 1929. p.p. 113–146, t. 58–61.), (KRYSHTOFOVICH:—The Oldest Angiosperms in the Cretaceous of Asia and other Contributions to the Mesozoic Flora of the mariline Province, Siberia. in Am. Jour. Sci. vol. 18, 1929. p.p. 519–525.)

KRYSHTOFOVICH 氏は露西亞の化石植物學の大家であるが、氏は又同時に現世顯花植物の大家である、即ち氏の前半生は専ら 顯花植物現世種の研究者であつたが中頃より其豊富なる現生種の經驗を抱いて化石植物の研究に入つたのである。我國の化石植物の研究者も實は如此徑路を採るべきが至當であるのである。

氏は極東西比利亞に發達する中世代の地層をバイカル系と總稱し、下部を Monggai series と云ひ、上部三疊より下部侏羅を代表するものとし *Clathropteris*, *Neocaramites* 等の主要素を有し、上部を Nikan series と稱し我領石統に相當するもので上部侏羅より下部白堊を代表するものとせり。

今回氏及び PRYNADA 氏は Nikan 統の化石を調査し蘇苔より 顯花植物に到る百〇九種を報ぜり、Nikan 統も上中下の三帶を區別し、下部よりは *Cladophlebis denticulata*, *Ruffodia Goepertii*, *Nilssonia compta*, *N. mediana*, *Podozamites lanceolata*, *Baiera pulchella*, *Elatocladus manshurica*, *Gingko* sp., *Carpolithes* sp. 等を産し、中部よりは *Cladophlebis denticulata* var. *insignis*, *Onychiopsis elongata*, *Thinnfeldtia* sp. 等を産す、上部は *Onychiopsis latiloba*, *Cephalotaxopsis brevifolia* 等を産するが、此に最も注意すべきは此最上部中に被子植物の化石の存する事なり、我領石統に相當する世界の他の地方の Wealden や Potomac には從來被子植物の化石の發見されし事極めて少し、然るに著者は本層より *Aralia lucifera* KRYSHT. *Proteophyllum reniforme* FONT. *Proteophyllum cordatum* KRYSHT. *Pandanophyllum Ahnerti* KRYSHT. 等の被子植物化石を發見せり、故に氏は Nikan 統の最上部を下部白堊 (Comancheum) の最上部 Aptian と決定せり。 (G. KOIDZUMI.)

クック、シュワルツ兩氏:—十字科植物の根瘤病菌の生活史 (W. R. I. COOK & E. J. SCHWARTZ:—The life-history, Cytology and Method of